

歩 & 目 デス 定 ラテス

Vol.90

『ジ・アース』が 目指したものは？

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

令和となり、流石にまだ「平成は遠くなりにけり」とまでは思わないが、それでもアノ平成の30年はどういう時代だったのだろうか、と考えることがある。

ここに一冊の地域文化誌がある。その名は『ジ・アース The Earth』、その創刊号だ。コンテンツポラリー・マガジンとの飾り言葉も付けられていて、発行日は1989年1月25日、そう平成元年が始まったばかりの頃に颯爽とこの冊子は登場した。編集・発行人の忽那修徳氏は、その創刊宣言の



ジ・アース誌

中で『ジ・アース』は愛媛における地方の高まりやイマジネーションを喚起する接地点でありたいと思っています。」という一文を高らかに載せている。冊子の内容は、標榜するところの愛媛情報テンコモリで、しかもそのそれぞれのクオリティが高い。創刊号での内容のいくつかを紹介しよう。

「愛媛の美術・台頭してくる作家たち」「新建築」「伊予のわざ師たち」「創意工夫・味の匠たち」「トイレ文化考」「愛媛のまつり風土記」「衛星時代」「夫と妻の文化人類学」「民家は語る」「埋蔵文化財」「伝統芸能」「自然」「エンジョイ・アウトドア」「町並みを訪ねて」「天然記念物を歩く」「道具考」「愛媛先人列伝」「子規民俗学の可能性」「地域づくり人物ドキュメント」「トーキング・ナウ」などなど。全ては掲載しきれな



犬伏武彦氏「民家は語る」



青木光利氏「瀬戸内島回廊」

いが、最後には「(財)愛媛県まちづくり総合センター・インフォーメーション」まである。略称「まちセン(昭和61年設立)」はこの「舞たうん」を発行している(公財)えひめ地域政策研究センターの前身である。

これらの表題だけを追ってみても、氏が愛媛の何を見つけて何を知ってもらおうとしたのか、何となくイメージが出来る。アート系のものから建築、職人文化、町並み、考古学に民俗学、各種文化財、あるいは過去と現在の活動する人物そのものにも光を当てようとしている。そうした愛媛を形作って来た、または今も形作っているとされる各ジャンルについて、様々な人の目線を通じて、年に六回の発行継続により浮き彫りにさせたかったに違いないのだ。事実、「愛媛の美術」や「新建築」では、若い作家や建築家の人と作品が紹介され、職人さんが支える味の世界など、筆者などは興味津々で読ませてもらった。中でも犬伏武彦氏の「民家は語る」は人気のページで、第一回は西条市氷見の森家だった。この歩キ目デスでも前々回取り上げたので読者諸氏にも少しは馴染みかと思うが、当時はそれこそ犬伏先生が発見した名建築だった。毎号掲載される先生の号は実に知られざる愛媛の建築文化が紹介されていてワ